大阪商業大学学術情報リポジトリ

1945年8月15日の永井荷風－通過者の目を通してみた新見－

メタデータ	言語: Japanese
	出版者: 大阪商業大学比較地域研究所
	公開日: 2022-05-13
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 石上, 敏, ISHIGAMI, Satoshi
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/1179

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

1945年8月15日の永井荷風

― 通過者の目を通してみた新見 ―

石　上　　敏

はじめに
1. 新見駅構内の荷風
2. 新見から勝山へ
3. 荷風による新見描写
4. 勝山での饗応
5. 岡山帰着後の荷風
おわりに―荷風と花袋

はじめに

私は、先に「地域文学史試論―岡山県阿新(あしん)地域を対象として―」[1] と題した一稿を投じ、古代から近世までの阿新地域[2] の「文学」、むしろ文学史を生み出す背景について、粗々と概観した。そして、従来の通説とは異なり、この地域は歴史を通じて豊穣な文学史蹟に満ちていると記した。

本稿では、続く近代・現代の中から、文学史において「現代」のはじまる一日とされる[3]、

---

1) 石上 敏「地域文学史試論―岡山県阿新地域を対象として―」(『大阪商業大学論集（谷岡学園創立80周年　大阪商業大学開学60周年記念号）』第5巻第1号（通号151・152号合併号）、2009年)。

2) 2005年4月1日に、新見(にいみ)市・大佐(おおさ)町・神郷(しんごう)町・哲多(てった)町・哲西(てっせい)町の一市四町が対等合併して、新見市となった。岡山県北西部（県全体の約11%）を占める。備中の北部ということで「備北(びほく)」「北備」あるいは「奥備中」などとも呼ばれてきた。

3) 近年の学生たちに、「現代」はいつからと思うかと問うと、大半の学生は1990年代から、あるいは平成（1989年）からであると答える。彼らの生まれた、あるいは物心ついたのが、ちょうどその頃だというのは、そのような解答傾向の大きな要因であろう。ちなみに、同じ質問を10年ほど前にした時は、多くの学生が現代は1980年代からと答えた。現在20歳前後の学生たち、現在30歳前後の卒業生たちにとっても、おおかたの文学研究者が考える「現代」、つまり、第二次世界大戦終結時の1945年8月15日からという考え方は、実感とは相当離れたもののようである。この一点からだけでも、「現代文学」というのは、そもそも時代区分から相当に揺れの大きい用語であるといえる。本稿では、通例に則って1945年8月の敗戦以降を「現代」と定めたが、あと10年もすると、否、すでに「現代は21世紀から」と考える人たちも少なくないだろう。社会史的には、それまでの価値観を一夜にしてくつがえすほどの事件が続き、日本にとって大きな曲がり角であった1995年が分かれ目になるのかもしれない。また、経済史的にはバブル崩壊の1991年、切りよく90年が目安とされるのかもしれない。いずれも1990年代であって、

1945（昭和20）年8月15日、それも日本が全面降伏を受け入れたと日本国民に理解された玉音放送が放送されている正午過ぎに、新見を通過した一人の文学者、永井荷風について見ていきたい[4]。

美作勝山町（現岡山県真庭市）に疎開していた谷崎潤一郎のもとを訪れて三日間旧交を温めた永井荷風が、1945年8月15日に新見を経由して疎開先（岡山市）へ帰った逸話についてである[5]。太平洋戦争最後の日に新見を通過した荷風は、どんな感想を抱いたのか。本稿では、永井荷風の一日を、昭和後期以後現代に至るまでの「現代文学」の問題として、また「地域」の問題として見ていきたい。

1. 新見駅構内の荷風

1945（昭和20）年8月15日。この日、永井荷風は新見を通り過ぎた。だれもが知る、そして忘れてはならない、太平洋戦争（第二次世界大戦）敗戦の日である。

その日まで足掛け三日間を過ごした谷崎潤一郎の疎開先である勝山から、岡山に向かう途次、姫新線（姫路と新見を結ぶ）を降りて伯備線に乗り換える折りに、荷風はわずかな時間ではあったが新見の空気を吸ったのである。

作家たちの旅行が日常茶飯事である現在ならば珍しくもないことであろうが、戦時中、それも終戦の発表があったその折りに、わずかな時間ではあれ、永井荷風が新見駅構内にいたという事実を、私は興味深く思う。

> 八月十五日、陰りて風凉し、宿屋の朝飯、鶏卵、玉葱味噌汁、はや小魚つけ焼、茄子香の物なり、これも今の世にては八百膳の料理を食するが如き心地なり、飯後谷崎君の寓舎に至る、鉄道乗車券は谷崎君の手にて既に訳もなく購ひ置かれたるを見る、雑談する中汽車の時刻迫り来る、再会を約し、送られて共に裏道を歩み停車場に至り、午前十

むしろ現在の学生たちの感じ方に近い。年齢や、経験した社会によって、私たちひとりひとりにとっての「現代」の定義、あるいは感じ方は、さまざまなものがあるだろう。本稿で、現代を1945年からと記すのは、ある程度便宜的な線引きととっていただきたい。なお、学生への質問は、1996年度から大阪商業大学で私が3年間担当した「現代文学論」、同じく1996年度から14年間担当している「日本文学論」（2003年度入学生から「日本文学」に改称）において、質問事項に記述式で回答する単純なアンケートの形でおこなった。

4) 以下に述べる通り、この一日もまた荷風の著名な日録『断腸亭日乗』に書かれ、多くの人の目に晒されてきたが、筆者の知る限り、専らこの日のことを新見に着目して論じた先例はない。たとえば第二次岩波書店版『荷風全集』第30巻「『断腸亭日乗』索引」（事項）にも、岡山・勝山・総社町などが立項されるのに対して「新見」はなく、このことに象徴されるようにほとんど注目されず見過ごされてきた。

5) 中国勝山駅は、1923（大正12）年に開通した作備線（津山―美作追分間）が2年後に延伸した折りに開業した。新見駅は1928（昭和3）年の伯備線開通によって開業している。翌1929（昭和4）年、新見―岩山間（8.37km）が作備西線として開通、さらに翌1930年岩山―勝山間（26km）が延伸して勝山―新見間（34.37km）が開通した。現在の中国勝山・月田・富原・刑部・丹治部・岩山・新見という駅の呼称や駅数は当時から変わらない。

一時二十分発の車に乗る[6]

荷風の著名な日録『断腸亭日乗（にちじょう）』[7]によれば、勝山から午前11時20分発の姫新線列車に乗り込み、新見で乗り換えて午後二時過（別の活字本では〔二時〕[8]）に岡山に到着した。すなわち、彼が新見駅に着いたのは12時19分頃、まさに玉音放送の直後であった[9]。当時の時刻表によれば、中国勝山から新見まで（34.3営業キロ）およそ1時間、新見から岡山まで（81.5営業キロ）が2時間20分程度かかったという[10]。

新見の駅に至る間墜（隧）道多し、駅毎に応召の兵卒と見送人小学校生徒の列をなすを見る、されど車中甚しく雑沓せず、凉風窓より吹入り炎暑来路に比すれば遥に忍び易し

応召されて姫新線の駅毎に列車に乗り込む新兵たちは、応召のその日が終戦の当日であったことをのちに感慨深く回想するだろう。ただし車中の彼らは、そして荷風は、その事

---

6)「八百膳」は、通例「八百善」（八百屋善左衛門）。江戸時代から近代に至るまで、江戸・東京を代表した料理屋の名称であり、荷風は、別のところでもしばしば八百善に言及している。「『断腸亭日乗』索引」（第二次岩波書店版『荷風全集』第30巻）によれば、『日乗』だけで、大正9（1920）年から昭和32年まで28箇所の言及（ただし昭和27～29年の3年間に過半の15例）がある。ちなみに直木三十五などは、東京にあるまともな料理屋は八百善だけであると極言している（「大阪を歩く」改造社版『直木三十五全集』第15巻、1935年所収）。

7)『断腸亭日乗』は1947年に「荷風日歴」と題してその一部が活字化されて以来、80年に全7巻、一部が87年に岩波文庫から上・下2巻で刊行されるなど、いずれも岩波書店から刊行されて現在に至る。本稿の引用は、第二次岩波書店版『荷風全集』第21巻「断腸亭日乗一」（1993年6月）より第26巻「断腸亭日乗六」（1995年1月）により、適宜『日乗』と表記する。ちなみに、断腸亭の「断腸」とは、いわゆる「断腸の思い」の意のみならず、荷風本人によれば「是れ秋海棠の異名なり。年浪草を見るに、名花譜に秋海棠一名断腸花、三才図絵に爛腸草云々と出だせる由を記るす。又花鏡に断腸花をもて秋色第一となすこと、東花坊が手拭に臙脂のついてやと咏（詠）まれたるも思ひあはされて、いとあでやかに、またいと怨める趣なり」（「断腸亭記」）という（第二次岩波書店版『荷風全集』第12巻「腕くらべ　断腸亭雑藁」210頁）。「秋海棠」（シュウカイドウ）は、別名「瓔珞草」（ヨウラクソウ）。ベゴニア科の多年生草本植物。江戸時代初期に移入されたという。松尾芭蕉に「秋海棠西瓜の色に咲きにけり」（『東西夜話』元禄4年）、各務支考に「手拭に紅のつきてや秋海棠」（同前）。各種歳時記参照。

8) 中央公論社版『荷風全集』第19巻～第22巻、また、東都書房版『永井荷風日記』第7巻所収本文との異同（第二次岩波書店版『荷風全集』の校異にもとづく）による。必要と思われる異同内容は、引用文中では〔　〕に入れて示す。また、補足・注記は（　）に入れて記し、適宜ルビを補う。

9) 正午より、日本放送協会の放送員（アナウンサー）のアナウンス、情報局総裁による趣旨説明、君が代演奏に続き、昭和天皇による約4分10秒の「勅語朗読」すなわち玉音、再び君が代演奏のあと、「終戦の詔書をうけての内閣告諭」等の補足がなされた。

10)『時刻表復刻版　戦前・戦中編』（JTB、1978年）の内、特に東亞交通公社刊『時刻表』第20巻第11号（昭和19年12月1日発行）の他に、『中国鉄道時刻表』（昭和16・9・15改正）、『写真集 岡山の鉄道』（山陽新聞社出版局、1987年）などを参照。谷崎によれば11時26分発とのこと（「疎開日記」）。荷風本人の記述に従えば、正午には大佐町（現新見市）の刑部駅付近を通過していた計算になる。

実をまだ知らない。新兵たちが乗り込むたびに車輌内には緊張が増して行ったのだろう。しかし、『断腸亭日乗』による限り、荷風は、あまりにも自然体、そう言ってよければ無頓着である。『日乗』への記載は、岡山市内に戻り、終戦の事実を知って、のちに見るように「祝宴」に興じて以後のことであるから、そのことを加味して解釈する必要があるけれども。

> 新見駅にて乗替をなし、出発の際谷崎君夫人の贈られし弁当を食す、白米のむすびに昆布佃煮及牛肉を添へたり、欣喜措く能はず、食後うとうとと居眠りする中山間の小駅幾個所を過ぎ、早くも西総社また倉敷の停車場をも後にしたり、農家の庭に夾竹桃の花さき稲田の間に蓮花の開くを見る、午後二時過岡山の駅に安着す

『日乗』を読む限り、荷風はおそらくこの日の昼下がり、往路と同様新見駅の駅舎から外に出ることはなかった。勝山で谷崎の愛妻・松子が作ってくれた白米のおにぎりと味付けそぼろ肉と昆布の、この当時にしてはおよそ考えられる限りの豪華な弁当を、彼は、新見駅で姫新線から伯備線へと乗り換えた汽車が出発する際に食べはじめたのである。出発と到着の時刻から考えて、おそらくは乗り換えの時間が短く、姫新線の列車が新見に到着すると岡山行きの伯備線にあわただしく乗り換えて席を確保したところで、おもむろに弁当の包みを開いたのであっただろう[11]。

当時66歳であった髭面で面長の荷風が、長い両足をきちんと揃えて座った列車の座席で竹皮の包みを開き、おにぎりとおかずを交互に口に運ぶ。そんな姿を思い浮かべると、つい心がなごむ。とともに、「新しい時代」がはじまってまず荷風のしたことが食事であり、つづけて居眠りであったことは、この作家の戦後を象徴するかのようであった。

2. 新見から勝山へ

荷風が、先に見た8月15日の復路と同じルートで勝山に向かったのは8月13日のことであった。岡山から伯備線（営業上は倉敷と伯耆大山間だが、一般的には岡山と米子を結ぶと理解されている）で新見に向かい、新見で姫新線に乗り換えて、勝山（当時は岡山県真庭郡勝山町）にいる谷崎潤一郎のもとに向かうためである。

谷崎もまた東京の戦火を避け、当初は1944（昭和19）年4月15日に熱海の別荘に疎開、1年余り後の翌年5月には魚崎（神戸）を経て15日に津山に至り、約2ヶ月後の7月7日に勝山へと疎開してきたのであった。元朝日新聞神戸支局記者であり、谷崎の津山疎開中に死去した岡成志の未亡人の紹介による経緯は、工藤進思郎氏の「作州疎開時代の谷崎潤一郎」[12]に詳しい。ちなみに、谷崎は勝山での疎開中7月24日に60歳の誕生日を迎えている。

11）本来11時8分発の列車が12分遅延して中国勝山駅を出発している。そのまま運行すれば、新見着12時7分の予定が19分になり、12時17分発の伯備線列車は数分遅れで姫新線列車の到着を待って出発したものと思われる。

12）工藤進思郎氏「作州疎開時代の谷崎潤一郎」（『岡大国文論稿』29、2001年）。

6月12日に明石から岡山へと荷風が移ってきたことを谷崎が知ったのは、それから4日後の16日のことであった。「疎開日記」[13] に谷崎は、「まことに意外の吉報と云ふべし」と記している[14]。「意外」とは、まさか同じ岡山に、という気持ちを込めての言であろう。

6月29日未明の岡山大空襲に遇った荷風の無事を7月11日に確認する頃から、谷崎は頻りに勝山への疎開を勧める手紙を荷風に送っている[15]。8月6日に隣県広島に落とされた原子爆弾によって岡山市内が一段と不安の色を濃くした頃に到着した谷崎からの手紙で勝山行きを決意した荷風であるが、10日には、「早朝岡山停車場に至り勝山行の切符を買はむとせしが得ず、空しく帰る」(『日乗』) と記している。谷崎が「切符の制限六月一日以来いよ〳〵厳になり」(「疎開日記」) と記すように、切符購入は困難になっていた。

荷風は、戦争末期にもかかわらず、岡山疎開時代にじつに精力的にあちこちを歩き回っている。それは、私たちの「戦争末期」イメージから見れば、いささか意外な姿である。同時にそれは、いかにも荷風らしい姿ではあった。そこには、いつ空襲に遇って命を失うかわからない戦況の中で、座して破局を待つくらいならば、その前に何でも見てやろうという荷風らしい好奇心と、歩き回ることによる不安の鎮静とが、こもごも含まれていたにちがいない。

さて、荷風は、勝山に出発する前日、8月12日の記録として、

> 晩間裏山に登り見るに妙林寺林間の墓地に線香の烟たなびき草花携へて往来する村人多し、夕日佳(よ)し

と記している。まさしく、現在でも岡山平野の夕日は絶品である。このとき荷風が見たのは、終戦三日前の「夕日」であった。そして、その美しい光景の中で荷風が見つめているのは、「妙林寺林間の墓地に線香の烟たなびき草花携へて往来する村人」なのである。

---

13)「疎開日記」は、1946年10月号の『人間』に「熱海・魚崎・東京」、翌年『新潮』3月号に「西行東行」、『新世界』同年同月号に「熱海ゆき」などと断続的に発表したものを、『月と狂言師』(梅田書房限定版、1949年。中央公論社、1950年) に所収。引用は、中央公論社新版『谷崎潤一郎全集』(全28巻) 第16巻「疎開日記」による。

14) 6月25日に荷風が谷崎へ宛てた書簡には、熱海へ3度手紙を出したが返事なく、たまたま谷崎が岡山にいることを知る旨を記しており、その後、両者の「文通」(8月6日付川口松太郎宛谷崎書簡) が始まる。7月2日付書簡で谷崎は岡山在の荷風の無事を案じ、さらに田舎へ移ることを勧めるが、翌3日夜に疎開先の津山が空襲を受けるなど戦局の明白な悪化にともなって、谷崎は頻りに荷風に来訪 (移住) を勧めるようになる。ただし、荷風書簡によれば切符の入手が困難であったのに加え、7月末以降荷風は下痢で病臥し、その「全快」(8月11日付、谷崎宛書簡) を待っての勝山来訪であった。谷崎にとって荷風は、自らを文壇に押し上げる役割を果たしてくれた恩人であり、理解者であった。とりわけ、1910 (明治43) 年頃、文壇に出られぬ焦りによって神経症を発するほどの窮地にあり、創刊に加わった第二次『新思潮』創刊号は発禁処分を受け、翌年に至って廃刊、さらに同年授業料滞納によって東京帝国大学国文科を退学に処せられた谷崎が、いかに荷風の推挙に感謝したかは想像に難くない。

15)「荷風もまた谷崎に満腔の信頼を寄せており、秋庭太郎『考證永井荷風』によれば、戦時中、自分の死後著作権は谷崎に委任するつもりと菅原明朗に語っていたという」(中村良衛「荷風人名録—師、友人、親族、女性など」『文学』第10巻第2号、2009年3・4月号)。

人々が皆、決定的に「死」に近づきながら、死者たちを弔う。そのような姿に対して荷風は何も感想を漏らしていないが、夕日を賞した「佳し」という短い一言は、そのような人々の行為のもつ、はかなさゆえの美しさに打たれた言葉でもあっただろう[16]。

それにしても、この土地特有の凄絶なほどに赤い夕焼けの中で、墓地に立ちのぼる線香の煙を凝視しただろうこの時の荷風の心は、いかなるものであっただろうか。東京での二度の空襲で焼け出された上、岡山に到着した半月後の6月29日未明、岡山大空襲に遇って命からがら逃げおおせた荷風が、生と死との接近、その間を隔つべき壁の低さと、しかしながら厳然としてある生と死との幻妙な差異を意識していなかったとは思えない[17]。

荷風は、8月13日の早朝、岡山駅に赴く。そして、切符を求める人々の長蛇の列を見て、「この光景に驚き勝山往訪の事を中止せむか」(『日乗』) と思う。しかし「また心を取直し行列をつくれる群集に尾して」並ぶこと半時間あまりで、この日は思ったより早く勝山行きの切符を買うことができた。ただし、旧盆で列車は込み合うと聞き、一旦寓居[18] に帰って朝食をとったあと、「再び停車場に至り九時四十二分発伯備線の列車に乗」ったのである。

---

16) 個的な「滅び」への傾斜を強く抱えていた太宰治が、太平洋戦争末期、まさに国民・国家全体が「滅び」へと向かう状況の中で、例外的にひとり落ち着いた創作姿勢を見せていることが、しばしば指摘されてきた。逆に、戦後は流行語となった「斜陽」の一言に象徴される独特の「滅びの美学」に沈潜してゆく。太宰とはまた別の形で孤立を深めて行く荷風が、戦争最末期のこの時点で「村人」(他者) への共感らしきものを示していることは、「滅び」を共有する時代背景とのかかわりの上で理解されてよい。

17) 岡山空襲については、岡山市史編集委員会編『岡山市史　戦災復興編』(岡山市、1960年)、日笠俊男氏 『米軍資料で語る岡山大空襲　少年の空襲史科学』(吉備人出版、2005年) など参照。日笠氏の「文人荷風と月―「地獄の月」(会報9号) 補遺―」(『会報6.29岡山空襲研究』第10号、1997年) は、短文ながら月に託した荷風の岡山疎開時の心情を活写する。「六月廿八日。晴。旅宿のおかみさん燕の子の昨日巣立ちせしまゝ帰り来らざるを見。今明日必異変あるべしと避難の用意をなす。果してこの夜二時頃岡山の町襲撃せられ火一時に四方より起れり。警報のサイレンさへ鳴りひゞかず市民は睡眠中突然爆音をきいて逃げ出せしなり。余は旭川の堤を走り鉄橋に近き河原の砂上に伏して九死に一生を得たり」(『断腸亭日乗』) という体験が、荷風を谷崎のいる県北へと向かわせる大きな要因となったことは間違いないだろう。他に、岡山疎開時代の荷風 (とくに終戦後の総社とのかかわり) を記したものに、渡辺壺堂氏「永井荷風と総社」(高梁川流域連盟機関誌『高梁川』第12号、1961年)、山本遺太郎氏「高梁川流域文学散歩　永井荷風「罹災日録」から」(同『高梁川』第19号、1966年) があり、後者は8月15日の「罹災日記」(『断腸亭日乗』) を引用する。管見の限り、8月13日～15日の勝山行き往還の伯備線に深く着目したのは、この文章が最初であった。

18) 『断腸亭日乗』によれば、「七月初三。晴。巌井三門町一ノ一八二六武南功氏方に移る。庭に天竺葵の花灼然たり〔三門町一丁目武南氏の邸内の二階に移る。邸宅は松樹鬱然たる丘陵の麓に在りて庭広くダリアの花灼熱たり云々〕」。「手帖〔釈文〕」(第二次岩波書店版『荷風全集』第29巻) には、「七月三日晴。山際の家ニ移ル (武南功巌井三門町一丁目一八二六)」とする。岡山駅から約1.2kmの距離。6月29日に弓之町の旅館松月を焼け出されて下伊福433の池田宅、翌日に三門町2丁目537の佐々木宅に移り、三遷してようやく落ち着いたことになる。武南(たけなみ)家では現在も荷風仮寓当時の伝承を守っておられる。

八月十三日、未明に起き明星の光を仰ぎつゝ暗き道を岡山〔岡山駅〕の停車場に至るに、構内には既に切符を購はむとする旅客雑遝し、午前四時札売場の窓に灯の点ずるを待ちゐたり、構外のところべには〔構外には〕前夜より来りて露宿するもの亦少からず、余この光景に驚き勝山往訪の事を中止せむかと思ひしが、また心を取直し行列をつくれる群集に〔行列に〕尾して佇立する事半時間あまり、思ひしよりは早く切符を買ひ得たり、一ト月おくれの盂蘭盆にて平日より汽車乗客込み合ふ由なり〔汽車乗客平日よりも雑沓する〕、余は一まづ寓居に戻り朝飯かしぎこれを食して後、再び停車場に至り九時四十二分発伯備線の列車に乗る、

この時の荷風のいでたちは、谷崎が詳細に記してくれている。荷風と谷崎が出会った折り（後述）に見てみよう。この日、未明から岡山駅に行って切符購入のために行列に並び、購入の後いったん岡山市内（三門）に帰って出直し、岡山駅を出発して新見に向かい、そこからさらに勝山に向かったことになる。しかし『断腸亭日乗』を見る限り、彼がそれを苦にしているそぶりは見えない[19]。それほど戦況は切迫していたのであり、当時この程度のことは全く普通のことに過ぎなかったからであろう。

汽車倉敷を過る頃より沿線の丘陵左右より次第に迫り来り短き墜（隧）道に会ふこと再三に及ぶ、沿道には到処清渓の流るゝあり、人家は山に攀づ、籬辺時に百日紅の爛漫たるを見る

といった具合いに、荷風を乗せた列車は進んで行く。このあたり、荷風の旅好きが顕著にあらわれている描写といえよう。高梁川渓谷を美しく描いた文章として、ぜひ記憶しておきたい一節である。そして、これより約半世紀前、田山花袋が憧れていたこの高梁川渓谷を訪れて風景の描写をしていたならば、それははたしてどのようなものになっていただろうかと、ふと思うのである[20]。

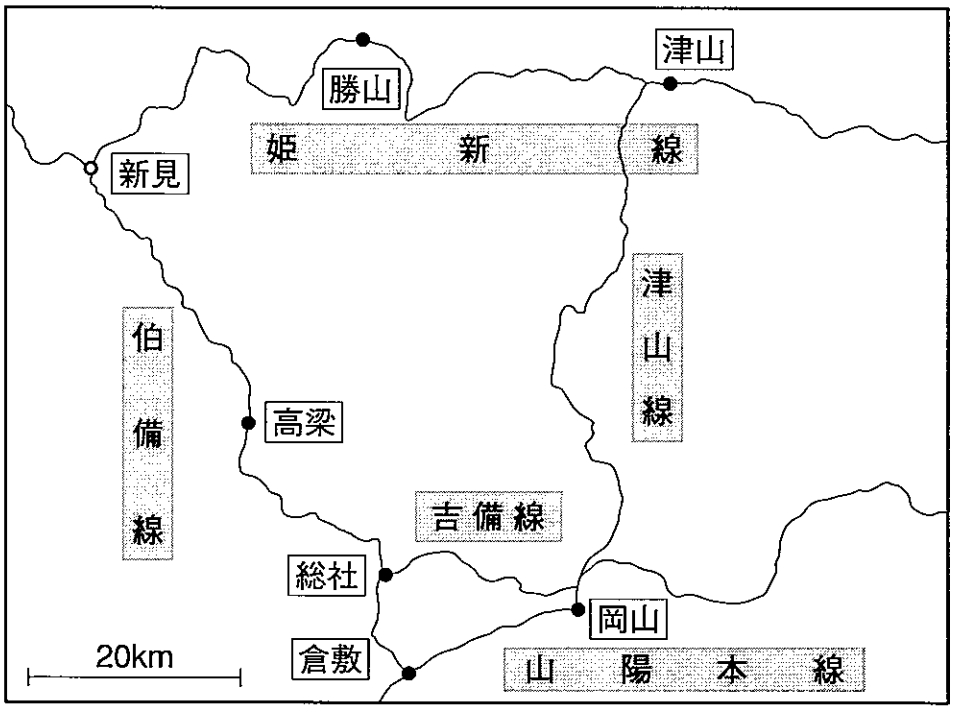
荷風が、「沿道には到処清渓の流るゝあり」と簡潔に描写したような、いたるところに流れる清流は、いまでも伯備線の車窓から手に取るようにながめることができる。まさに「山によじのぼった」と形容できる山腹の人家や、絢爛と咲き誇ったサルスベリを、現在も見ることができるのは僥倖と言ってよいだろう。もちろんその背景には、開発から取り残された過疎地域という、社会的な負の構造が横たわっているわけであるけれども。

ちなみに現在の新見市域は、1985年44019人－1995年39891人－2005年36073人と、10年毎に約10%ずつ人口が縮小しており（総務省統計局・国勢調査）、人口減少に歯止めがかからない状況にある。

---

19) ちなみに荷風は、終戦後8月30日に岡山を発ち、大阪を経て27時間かけて東京にたどり着いた時も、頼るべき従弟の杵屋五叟（大島一雄）が熱海にいることを知り、翌日とんぼ返りで熱海に向かっている。じつに乗り物での移動を苦にしない66歳であった。

20) 石上 敏「田山花袋『蒲団』と新見」（『大阪商業大学論集（人文・自然・社会篇）』第5巻第3号（通号第154号）、2009年）参照。



永井荷風岡山疎開関連駅名・路線図

は路線名（姫新線・伯備線・津山線・吉備線・山陽本線）

は主要駅名（新見・勝山・津山・高梁・総社・倉敷・岡山）

3. 荷風による新見描写

荷風は、「正午の頃新見と云ふ停車場に着し」た。岡山を出発してから約2時間20分（15駅）。現在のJR伯備線普通列車（17駅）が1時間30分程度であるから、さほど遠わない時間ととるか、あるいはかなり短縮されたと見るべきか、ここは意見の分かれるところであろう。ここで荷風は伯備線から姫新線に乗り換え、勝山へと向かう。そのとき、新見駅の周辺を、次のように描写している。

> 車窓より町のさまを窺ふに渓流に沿ひ料理屋らしき二階家立ちならびたり、人家皆古びて清潔ならず、鉄道従業員この地に居住するもの多きが如し

人間のエゴの最たるものといえる戦争の下、ただでさえ人間嫌いの荷風が自然に目を奪われながら、人間の匂いのする場所を嫌っているといって、非難するには当たるまい。

戦争の期間にとどまらず、自然の描写の多彩さに比べて荷風は人間の描写をなかなかし

ない。伯備線列車内で「僅(わずか)に腰かけることを得たり、前側に坐しゐたる老婆と岡山市中罹災当夜の事を語る」などというこの日の描写は、例外的と言ってよい。

荷風は、戦争末期の人々の姿を詳細に書き記すのに耐えられなかったわけではない。戦時中も戦後も、その傾向はほぼ一貫している。そんな中での、これだけ人間くさい描写は貴重である。また、荷風をして人間の気配を書かしめた新見駅頭の風景もまた貴重であった。

ただしかし、荷風は戦争に蹂躙される人々の姿を直視することは好まなかった。敗戦後6日目の8月20日に至って、彼が『断腸亭日乗』の一節として記した「兎(と)に角(かく)に平和ほどよきはなく戦争ほどおそるべきものはなし」の一言は、まさに切実な肉声であった。その後に付け加えた「果樹園の主人平松氏に贈る」との詞書をもつ「桃つくる翁めでたき齢(よわい)かな」、「某子に送る手紙のはしに」と詞書した「旅に出て聞く鳥や皆閑古鳥」の二句は、他者との交流を切望してやまない荷風の孤独と、孤独の中に安住してゆくしかない戦後の荷風の姿を、まさに両面から予言した二句であったと言える。

ちなみに、1990年代には、荷風の見た「料理屋らしき二階家」は一軒だけが過日の面影を残していた。高梁川の川沿いに依然料理屋は多く、それらはそれぞれに、いかにも現代らしい新たな装いを加えて変貌をとげている。それにしても、「人家皆古びて清潔ならず」と、ことさらに書き付けなければならないほど、当時の新見の人家は古びていたのだろうか。これが荷風のハイカラ趣味の裏返しでなければ、昭和初年代の隆盛以後の、この地域の経済的沈滞には、相当のものがあったということを示す一助となる[21)]。

「鉄道従業員この地に居住するもの多きが如し」とは、宿舎が並んでいる一角を見て記したのだろう。それ以後も長く新見駅の周辺には旧国鉄（現JR西日本）の職員宿舎が建ち並んで、独特の雰囲気を醸し出していた。

このようなわずかな描写ではあるが、荷風が新見を描いてくれていることに、私は安堵にも似た気分を抱く。彼は8月13日の昼下がり、確かにこの地にいて、新見駅周辺の風景をながめたのである。この書きようでは、駅舎から外には出なかったようであるものの。

そして、汽車は新見駅を出発する。ところが、

> 新見の駅を発するや左右の青山いよ〳〵迫り、渓流ます〳〵急なり、されど眺望広からざるを以て風光の殊に賞すべき者なし、一歩々々袋の中に追ひ込まれ行くが如き心地す

と、新見から勝山までの車窓風景は、荷風散人の気に召さなかったようである。これは、新見駅頭の評価よりまだ悪い。「左右の青山いよ〳〵迫り、渓流ます〳〵急」とは、現在もなお変わらない風景と言ってよいだろうし、新見から勝山に向かう姫新線の風景を的確

---

21) 新見は、平安時代から都で重用されていた牛の産地として、あるいは東寺の主要な荘園として新見市庭を中心に発達し、近代に至って本稿にも述べる姫新線や伯備線、さらに広島方面とつなぐ芸備線という鉄道交通三線のターミナル駅として、中国山地から伐り出される木材の集散地、あるいは豊富な石灰石を用いたセメント産業によって発展を遂げた。注1）の拙稿参照。

に描写したものといえようが、「風光の殊に賞すべきものなし」とは、辛辣な描写である。

当時は、鉄道義勇戦闘隊員を示す「戦」の徽章を胸につけた車掌が乗っていたはずだが、いまやワンマンカーとなった姫新線のディーゼル列車には、夏に窓を開け放していると沿線の樹々の葉が入ってきそうなくらいに山が迫っている。関西でいえば極楽橋に近づく頃の南海高野線を思い起こさせ、私などはじつに風流な風景だと思う。

この一節からは、陋巷趣味と言われる荷風が意外に眺望の広く展けたところを好んだと逆に知ることができる。「一歩々々袋の中に追ひ込まれ行くが如き心地」とは、荷風の閉所忌避傾向を示唆するようで、しかし、そこにはまた当時の社会状況を強く反映した心境があったに違いない。実際、そのように列車に乗っている間にも、いつ敵機の襲来があるともわからず、運が悪ければ谷崎と再会する前に命を落とすことも考えられる戦況であった。

つまり荷風が、一歩一歩袋の中に追い込まれていくような閉鎖的な風景に、息苦しい圧迫感を感じたことは、彼もまた日本全土に刻々と迫り来る戦火の予感に心のどこかで不安を抱いていた（強く言えば脅えていた）ことを示しているのでもあろう。無論それゆえの疎開であった。ただしそれは、その頃日本本土に暮らしていただれもが当然身に沁みて感じていたことなのであった。

岡山－勝山間が、乗り換え時間を入れて3時間余り。所要時間は、現在とそれほど変わらない[22]。むしろ現在の方が、乗り換えなどの関係で、時間帯によっては長くかかることすらある。伯備線には現在、岡山－新見間を約1時間で結ぶ特急はあるけれども、姫新線の新見－勝山間には各駅停車以外の列車はなく、むしろこの頃のほうが便はよかったと言えるかもしれない。このような事実に、都市部・都市間の交通が戦後60年余りの間に急速な進歩を遂げたという紛れのない事実を並べたとき、頑迷なまでの中央集権構造から抜け出せないこの国全体のあり方の中における、「地域」の抱える大きな問題点が透けて見えてくる。

4. 勝山での饗応

本土空襲が猖獗を極めていた太平洋戦争の最末期、日本列島で、まだこのように列車輸送が支障なく行なわれていたことは、私たち戦後世代の戦争イメージを揺らし、変更を迫る。それは、荷風が勝山に着いてからの食事についても同様である。到着の昼は佃煮のおむすびだけであったものの、夕食の膳には白米、豆腐汁、そして小魚が三尾と胡瓜もみ、と「目下容易には口にしがたき珍味」が並んでいた。無論これは何よりも、恩人荷風を迎えた谷崎の心踊りの反映であっただろう。荷風が到着した様子を、谷崎は次のように記している。

午後一時過頃荷風先生見ゆ。今朝九時の汽車にて新見廻りにて来れりとの事なり。カバンと風呂敷包を振分にして担ぎ外に予が先日送りたる籠を提げ、醤油色の手拭を持ち

22）最新の時刻表（2009年3月18日改正）で、岡山－新見間が1時間25分から1時間30分程度（17駅）、新見－勝山間が50分程度（6駅）。乗り換え時間なしで、岡山－勝山間が2時間20分前後かかることになる。姫新線には、1960（昭和35）年に至って準急「みまさか」「みさき」（6年後から急行）が運転されたが、1989（平成元）年に廃止された。

背広にカラ（カラー）なしのワイシャツを着、赤皮の半靴（短靴）を穿きたり。焼け出されてこれが全財産との事なり。然れども思つた程窶(やつ)れても居られず、中々元気なり。

「新見廻り」と記したのは、岡山から勝山へは津山廻りで行く経路もあったからであり、むしろそのほうが一般的であった。ほかならぬ谷崎も、1945年にいったん上京したあと、勝山を再訪してその地で年を越す際には、岡山から津山を経由している。ただし、津山線は沿線にある軍関連施設のため軍用線としての性格が強く、決戦体制の下これを避けたとも考えられる（注10『写真集　岡山の鉄道』参照）。また、「中々元気なり」とは、荷風の病臥（注14）を案じていた谷崎ゆえの一言であっただろう。焼け出された荷風を気遣って、あらかじめ籠（バスケット）を送っていたのでもあった。

一方の荷風は、荷風らしいといおうか、専ら谷崎夫人松子の描写と、食事の描写である。

初めて細君に紹介せらる、年の頃三十四五歟(か)、痩立の美人なり、佃煮むすびを馳走せらる、一浴して後谷崎君に導かれ三軒先なる赤岩といふ旅舎に至る

赤岩旅館では、再会を祝して互いの身の上に話が花咲いたことであろう[23]。

明けて8月14日朝、谷崎は荷風を案内して、旭川(あさひがわ)の川べりを散策する。現在もなお当時の面影を残した家々の並ぶ河畔である。長躯の荷風と恰幅のよい谷崎が、山間を悠々と流れる旭川の川べりを並んで歩く。近代文学における白眉と呼ぶべき光景である。荷風66歳、谷崎60歳の盛夏のことであった。

昼飯は「小豆餅米にて作りし東京風の赤飯」、夜はこの頃大いに珍しかった日本酒で牛鍋（スキヤキ）を囲んでいる。

この晩、共通の知人である吉井勇に向けて書いた葉書が、京都府立総合図書館に現存する[24]。ただし、その晩も、たとえば大阪は「最後の空襲」によって多大な被害を蒙っている。そのように、世界中で日本列島のみが爆撃を受け続けていた、最後の一夜であった。

23）たとえば、『おかやま　文学の古里』（山陽新聞社、1992年）に富阪晃氏は、「都しのぶ疎開の日々　谷崎潤一郎と勝山」、「戦災ドキュメント　永井荷風と岡山空襲」という2節を設け、それぞれで谷崎と荷風との勝山での出会いを簡潔に述べている。後節に「わび住まいの中で心が弾んだのは、谷崎潤一郎との再会だった。八月十三日、伯備線新見経由で潤一郎の疎開している勝山を訪れ二泊した。時勢に背を向けた老作家同士の語らいは、楽しいものだったのだろう。日記は多くの行数を費やす」（126頁）と見えるのは、「新見」に言及した数少ない例の一つである。

24）注12）の工藤氏「作州疎開時代の谷崎潤一郎」による。当時の吉井の住所は京都府綴喜郡八幡町。その後、1960年に没するまで京都で過ごし、特に谷崎との交友は篤かった。谷崎は、当初割烹小野はる方（新町）の離れに、同年暮れに旅館今屋（城内）に移って、翌年3月に京都に移住するまでの約8か月を勝山で過ごした。勝山滞在中、谷崎は旭川畔の散歩を楽しみ、今屋二階の書斎で『細雪』下巻を書き上げた（反故原稿を残すことのほとんどなかった谷崎の「細雪」の反故原稿7枚が勝山郷土資料館に現存する。注23）の富阪氏『おかやま　文学の古里』118頁参照）。荷風が「家」を求める非定住者であったとすれば、いわば谷崎は定住型の放浪者であった。

このように歓迎された荷風は勝山二日目にして、「谷崎君の勧むるがまゝ岡山を去りこの地に移るべき心」(『日乗』) になっていた。しかし、戦況の悪化に加え、人心も平穏ならず、他郷の罹災民が食を得るのも苦しむ中で「谷崎氏の厄介にもなり難し」(同前) と、翌日岡山に帰ることを決める。

この折りに荷風は、「ひとりごと (問はず語り)」「踊子」「来訪者」という三作の原稿を、谷崎に託す。そのまま谷崎の世話にはならず、岡山で過ごすことを決めていた心境を物語る行動である。岡山市街地は、すでに6月29日の「岡山大空襲」によって大半 (市街地の約73%。注16の『岡山市史 戦災復興編』など参照) が灰燼に帰していた。そこに荷風の人生観、覚悟と呼ぶには柔軟ではあるが彼なりの生き方を見ておいてよいはずである。

谷崎の側では、「食料買入れの道を開きたる上」(「疎開日記」) で改めて荷風を招くつもりであったが、はたしてその場合にも荷風は応じたかどうか。いずれにせよ、翌日の終戦によって、荷風は再び勝山へ赴く必要を、谷崎は再び荷風を招く必要を失った。勝山滞在の継続はともかくとして、もう一日だけ勝山に滞在していたならば、荷風もまたその地で敗戦の事実を知ったはずである。

15日の朝食は、鶏卵、玉葱の味噌汁、ハヤのつけ焼き、ナスの香の物と、「今の世にては八百善の料理を食するが如き心地」(『日乗』) であった。「八百善」とは、先述の通り江戸・東京時代を通じて最高級の料理屋、いまでいえば3つ星レストランの超有名店である。そして、出発に際して手渡されたのが、新見駅を列車が出発するとともに開くことになる谷崎夫人心づくしの弁当であった。

勝山滞在中の献立リストからは、美食家谷崎が、荷風をいかに厚くもてなそうとしたかが生き生きと伝わってくる。谷崎の側の荷風の『断腸亭日乗』に対応する記録としては、先記の「疎開日記」が知られている。抑制された筆致から窺う谷崎の心情の大半は推測の域を出ないのだが、谷崎の側にも勝山という異郷で恩人との「今生の別れ」を惜しむ気持ちが強くあったのだろう。ただ、「疎開日記」は、まさにこの8月15日を以て閉じられており、それ以後の谷崎の動静を知るには、12月1日に開始される「越冬記」を待たねばならない[25]。

ただし荷風が『断腸亭日乗』に谷崎の様子を詳しく描いているかといえば、じつはそうではない。あれだけ献立を詳しく書き記した荷風であるにもかかわらず。明らかなのは、このような荷風の性向は決して戦争のせいではなかったということだ。無論含羞もあったであろうが、この辺りに、荷風のどこか歪(いびつ)な性向を感じるのは私だけであろうか。

もちろん、人に対する美辞麗句を並べても、そこに真情があらわれているとは必ずしも言えないように、食べ物を列挙しただけで人間の真情が伝わってくる文章というものも確かに存在する。思い出すのは、マラソンの円谷幸吉選手の遺書である。食べたものを数え上げ、「美味しゆうございました (おいしゅうございました)」と繰り返すその文章からは、何ものにも代えがたい哀切なほどの感謝の気持ちが伝わってきて、私たちの心を揺さぶる[26]。荷風の文章に直接感謝の言葉はないけれども、もてなされた食事を克

---

25) 「越冬記」は、『小説界』1948年7月号に掲載。中央公論社新版『谷崎潤一郎全集』第16巻 (1982年) 所収。

明に書き記したあたりには、そのような気配がないわけではない。しかし、谷崎との再会時の心境にはじまり、三日間にわたる谷崎との談話の内容がどのようなものであり、そこから荷風が何を感じたかを、いま少し記しておいてほしかったと私などは思う[27]。

ところで、美食家として知られた荷風が、その晩年には、ほとんど食事に頓着しなくなったことが、『断腸亭日乗』から知られている。とりわけ亡くなる一年ほど前から、そばやカツ丼、それも同じ店の同じ質素なメニューをかたくなに食べ続けたことは、かつての美食家荷風を知る者には、せつないエピソードである。しかしそれも荷風に言わせれば、「(いまのこの国の) いったいどこに美食がある？」という彼なりの批判をこめた反骨、いわば裏返しの美意識であった[28]。

5. 岡山帰着後の荷風

荷風が、松子夫人手製の弁当をたずさえて勝山から新見を通り抜けた日、言うまでもなく、時局はもはや壊滅的であった。それまでに軍人軍属230万、民間人80万人と言われる日本人が戦死し（旧厚生労働省資料)、その3倍とも10倍とも言われる外国人の命を日本人が奪った。日本人だけではなく人類の歴史の中でも最大最悪の戦争は、しかしこの日、その幕を下ろそうとしていた。

当時の新見駅は、広島と新見をつなぐ芸備線、また姫路と新見をつなぐ姫新線、そして山陽と山陰地方をつなぐ伯備線という三本の線路が交わるターミナル駅として、岡山から

---

26) 文学との関わりでいえば、川端康成が「繰りかへされる「おいしゆうございました」といふ、ありきたりの言葉が、じつに純ないのちを生きてゐる。そして、遺書全文の韻律をなしてゐる。美しくて、まことで、かなしいひびきだ」と述べ（「円谷幸吉選手の遺書」『風景』1968年3月号)、三島由紀夫が「傷つきやすい、雄雄しい、美しい自尊心による自殺」「この崇高な死をノイローゼなどという言葉で片付けたり、敗北と規定したりする、生きている人間の思い上がりの醜さは許しがたい」（「円谷二尉の自刃」『産経新聞』1969年1月13日夕刊）と記している。丸谷才一『日本語で生きる・3　恋文から論文まで』（福武書店、1987年)、小池民男『時の墓碑銘（エピタフ）』（朝日新聞社、2006年）参照。

27) 『日乗』には、8月16日に「礼状を勝山に送る」と見えるが、実際に確認される書簡（第二次岩波書店版『荷風全集』第27巻「書簡」参照）では、9月21日に至って「拝呈陳者岡山逗留中ハ一方ならぬ御厚意に与り且勝山御訪問の折ハ色々御馳走に相成り御親切忘難く存居候（ぞんじおりそうろう)」（『荷風全集』第27巻、426頁、書簡番号680）と記している。いずれにせよ、荷風が谷崎に感じた「御厚意」の大きな部分を占めているのが「御馳走」であったと読み取れる文面である。

28) 上記は、NHK総合テレビ放送「文豪たちの食卓」という、2000年夏の番組を見て、大いに刺激を受けて礎稿を書いたものである。4回シリーズのその番組は、最初の回が漱石と鷗外であり、2回目が荷風と潤一郎であった。作家の嵐山光三郎がレポーターとなり、「文豪」たちのエピソードを伝える現地に赴いて当時の食卓を再現するという趣向が骨子の番組である。荷風と谷崎を取り上げた第2回目は、当時の荷風の姿を知る人たちが次々と出てきて、実際に荷風が食事をした場所で当時の回想を語り、それらの内容がじつに興味深い番組であった。嵐山光三郎『文人悪食』（新潮文庫、2000年）参照。かつて美食家の大道を歩んでいた荷風（「西洋料理」『文明』1916年10、11月など参照）が、晩年に至り浅草尾張屋で「かしわ南蛮」、急死前日まで近所の料理屋大黒家で「並カツ丼」ばかりを食べ続けたエピソードなどは、彼の「反美食」を象徴的に示すものとして広く知られる。

80キロ以上の山の中という位置からは想像もできないほどのにぎわいを見せていた。このあたり、荷風の描写（先掲）との間にはいささかズレがある。東京に生まれ、ワシントンやパリでも暮らしたことのある都会人荷風の目には、「人家皆古びて清潔ならず」と見えたのかもしれないが。

中国山地で伐採される木材の集散地として、新見には多くの林業関係者が集まり、彼らを泊める宿も多数存在した。高梁川沿いに数キロも北上すれば、平安時代以来黒牛で有名な千屋の周辺に、また南に数キロ下れば井倉駅の周辺にも何軒かの宿があり、商用で滞在する相当の人数を受け入れることができた。これはいわば、かつて高梁川の中洲に市が立って以来の、700年間の新見の市庭の伝統を受け継ぐものでもあった。おそらく若き日の牧水が泊まったのも、そんな旅館のひとつであったはずである[29]。

この日荷風が終戦の事実を知ったのは、勝山から約3時間をかけて岡山に到着し、列車から降り、当時疎開していた三門の居候先（岡山駅から西へ約1.2キロ）へ帰着してからのことであった。そのときのことを、荷風はこのように書き付けている。

> 午後二時過岡山の駅に安着す、焼跡の町の水道にて顔を洗ひ汗を拭ひ、休み〳〵三門の寓舎にかへる、S君夫婦、今日正午ラヂオの放送、日米戦争突然停止せし由を公表したりと言ふ、恰も好し、日暮染物屋の婆、鶏肉葡萄酒を持来る、休戦の祝宴を張り皆々酔うて寝に就きぬ、

「あたかもよし」の一言が、荷風らしい。「休戦の祝宴」という表現も、その騒ぎの様子が目に見えるようである。「染物屋の婆」が持ち寄った「鶏肉葡萄酒」、とりわけ後者に揺曳する鮮やかな色彩と存在感は、凡百のフィクションよりも雄弁に、この日の開放感と時代の転換を象徴している[30]。ただし荷風に待っていたのは、むしろ決して平坦ではない「戦後」であった。

いささか以上の大騒ぎを思わせる岡山市内の「休戦の祝宴」に対して、やはり終戦時のスラップスティック（ドタバタ喜劇）と呼ぶべき一幕を、谷崎が書き記している[31]。

29）早稲田大学在学中の若山牧水が、園田小枝子への思いを抱えつつ夏休みの帰省途中に詠んだという「幾山河越えさりゆかば寂しさのはてなむ国ぞ今日も旅ゆく」は広く知られる。『蒲団』（『新小説』9月号）が発表されたのと同じ1907（明治40）年の7月2日、牧水が備中国と備後国の国境であった二本松峠の熊谷屋（当時、阿哲郡哲西町）に宿泊して、有本芳水に送った葉書に初出するという（芳水の述懐及び本田實氏の調査による）。牧水が前日宿泊したはずの新見市内の宿所については未詳。

30）『断腸亭日乗』には、もう1箇所印象に残る「葡萄酒」が登場する場面がある。荷風が、待ち望んだ帰京を果たした8月31日の一節である。「八月三十一日。終日車中に在り。総社町以呂波旅館のつくりし握飯、甘藷。岡山の媼より恵まれし奈良漬を食ひ、葡萄酒に渇を医す。美味終生忘れまじと思ふほどなり」（『日乗』。傍点引用者）。

31）1945（昭和20）年9月3日付嶋中雄作宛書簡（水上勉・千葉俊二『増補改訂版 谷崎先生の書簡——ある出版社社長への手紙を読む』中央公論新社、2008年）。「越冬記」によれば谷崎は、1946年2月に至って「八月十五日」という戯曲（一幕物）を書き始めたが、未完に終わっている。

とう〳〵平和が参り候　この辺の田舎の人は無邪気なものにてついきのふまで政府や新聞のいふことを真に受け勝つ〳〵と思つてゐたゞけにふんがいのしかたは非常なものにて（中略）しかしこゝらはまだよき方にて東北地方の田舎などではアメリカが降参したのだと思つたところも有之候由笑ひ話にしてしまふには余り深刻に御座候

これは、確かに笑えない喜劇の一幕であった。そして谷崎も、「とう〳〵平和が参り候」と、素直な心情を綴っている。

彼らにとって、少なくとも荷風にとっての敗戦とは、当初、「日米戦争」の「突然」の「停止」だったのであり、それを記す筆にさほどの緊張感は感じられない。しかし、と考える。「休戦の祝宴」の最中に、その後のあれこれについて不安を言い出す者はいなかったのであろうか。荷風は本当に、祝宴の酒に酔って心地よく寝てしまったのであろうか。

そう考えるとき、『断腸亭日乗』8月15日の欄外に記された「正午戦争停止」の文字は、荷風の醒めた意識と、将来に向けての不安を物語るように思えてならない。

ところで、私にはもうひとつの疑問がまとわりついて離れない。新見から岡山までの列車に敗戦の知らせを持ち込んだ者はいなかったのであろうか。これから列車に乗ろうとして、それを聞いた誰もが列車に乗ることを忘れてしまったとでもいうのであろうか。知人にそのニュースを知らせに走る者は、きっといたはずである。いや、列車の中では敗戦のニュースをだれも知らなかったと荷風が言うならばそれでもいい。当時の列車内にラジオを持ち込む者などいなかったはずだ。しかし、玉音放送からすでに約2時間たった岡山の駅舎に降り立った荷風が、そのことを知る余地はなかったのであろうか。現在ならば、わずかな運行の遅れも大書して貼り出す鉄道当局は、まだその発表に半信半疑でいたのだろうか。岡山駅から三門まで約1.2キロの道のりを、途中で水道水を借りながら（あるいは、主人もわからない破壊された水道の蛇口を使いながら）歩く荷風の耳目には、その重大ニュースが入らなかったのだろうか。町の様子は、それまでとどこも変わっていなかったのだろうか。

このように考えてみると、『断腸亭日乗』の描写には脚色が加わっているかもしれないと思われるのだ。帰路のどこかで何となくそのことを知ったというよりは、「S君（菅原明朗）夫婦」から聞かされたと書いたほうがドラマチックであるといったような理由で。

ここでは、「休戦の祝宴」を仕舞って自室に戻った荷風が、ある種の高揚感と解放感から、こう書いて寝たのではないかと少しだけ疑っておく。『断腸亭日乗』には、虚構と言えば言いすぎになるが、どれほどかの演劇的脚色が含まれているというのは、現在の通説といってよい[32]。

32）『断腸亭日乗』の虚構性については、荷風の生前に公表が始められたことからも、さまざまに指摘されて今日に至る。注16）の渡辺氏「永井荷風と総社」には、敗戦以後、自らを俊寛僧都になぞらえて帰京の機会を待つ荷風が、8月27日に「三門の寓舎には避難の人少からず情実追々わづらはしくなり行くやうなれば之を避けん」（『日乗』）と、総社の旅館「いろは」に赴く姿が描かれる。荷風が帰郷の途についたのは、その3日後（30日）のこと。総社からの出発であった。また、同じく山本氏「永井荷風「罹災日記」から」は、さらに詳細に総社逗留を記し、「旅館以呂波」逗留のきっかけとなった「村田氏」を音楽評論家の村田武雄と指摘している。付け加えるならば、この頃、総社の隣村である清音村には横溝正史が疎開していた。のちに岡山地方を舞台にした数々の推理小説を書く素地が固められていたことになる。

おわりに—荷風と花袋

1945年8月15日の昼下がり、新見駅構内に停まった伯備線列車の車窓から、谷崎夫人松子手製の弁当を手にしつつ、高梁川沿いの風景に目をやり、山並みを見上げた永井荷風のその顔付きは、いかばかりのものであっただろうか。もはや会うことが叶わないかもしれない谷崎潤一郎から心のこもった供応を受けた数日間のことどもが、竜宮での出来事のように遠く脳裏に去来していたであろうか。それとも、悲惨な状況が予想されるにもかかわらず、もはや報道すら信頼できないこの時期の遠く離れた東京のことを思い返していただろうか。谷崎との三日間を過ごした荷風にとって、車窓から入る風は同じ「炎暑」ながら二日前に比べてはるかに涼しかったという（81頁参照）。

ちなみに、かつて友人への書簡の中で田山花袋の『蒲団』を激賞したのは、この荷風であった[33]。

> たしか十一月の新小説であつたと思ふ、花袋氏の『蒲団』を読んだ自分は非常に敬伏しましたよ。すつかりロシヤの自然派式で、然も日本人の頭から出た純粋な明治の作物だと思ふ[34]。

その頃、29歳の荷風はフランスのリヨンにいた。そして、日本から送られてきた『新小説』に載る『蒲団』を読んで「敬伏（服）」し、その感動を、明治40年（1907）12月11日付の書簡で東京の友人西村恵次郎（渚山）に書き送ったのである。『蒲団』がロシア自然主義の流れを汲むことを見抜いた批評家が、ここにも一人いたわけであり、しかも彼はそれが日本人による「純粋な明治の作物（作品）」であることを喜んでいる。確かに、「後年の荷風を知るものにとつては、『蒲団』にこれだけ感心したとはとても信じられないほどだし、しかも日本にゐたのではなくフランスに渡ってからなので、いよいよ不思議な気がする」[35] などという批評にも一理ないわけではが、おそらく、それだけ荷風の望郷の念も高まっていたのだろう。

同じ年の12月に、「確か十一月の新小説であつたと思ふ」と書くことからは、日本から送らせた雑誌を彼が読みあさっていたことがうかがわれる。それが二、三冊であれば、「確か十一月の新小説であったと思ふ」などという書き方はしないはずだ。ただ、知っていながら、「確か十一月の」などともったいぶってみせることも、この頃の荷風ならば、およそありえそうなこととも思えるのだが。

33）第二次岩波書店版『荷風全集』第27巻「書簡」122頁（書簡番号89「12月11日　西村恵次郎宛」）。なお、花袋の逝去を知った荷風は、『日乗』昭和5年（1930）5月14日に、「小説家田山花袋昨十三日病むで没せしと云ふ、余は田山氏とは殆面識なし、往年西園寺公の席上にて相見しことありしのみ」（第二次岩波書店版『荷風全集』第22巻「断腸亭日乗二」338頁）と記している。

34）「花袋氏」という書き方は、これ以前に荷風は花袋のことを知っていたと思わせるが、事実は注33）のようであった。のちの両者の文学思潮的な距離の大きさから考えても、これは意外な激賞であったと言える。

35）丸谷才一「男泣きについての文学論」（『丸谷才一批評集』第1巻、文芸春秋、1996年）。

旅愁を抱えた異国の地で、日本から届いた『新小説』の中に見つけた「すつかりロシヤの自然派式で、然も日本人の頭から出た純粋な明治の作物」に、荷風は欣喜雀躍したのである。おそらく、皮肉屋の彼が日本にいたのであれば、少なくともこんな手放しの褒め方はしなかったはずである。ともあれ、これが荷風の『蒲団』との出会いであった。

それから38年後の昭和20年8月、はたして荷風は、かつて激賞した『蒲団』に「新見」が描かれていたことを、ちらとでも思い出したであろうか。たぶん思い出さなかったであろう。もしそうであれば、彼はおそらくその日の『日乗』にそのことを記したはずである。「日米戦争突然停止せし由」を知った8月15日はともかく、「備中国新見町」(『蒲団』) を最初に経由した8月13日の日記には[36]。

このように、新見を介して近代作家随一の洒落者永井荷風と、素朴なイメージの強い田山花袋とが交錯しているという事実は、そのコントラストに妙があり、興味深い逸話ではないだろうか。

かくして、荷風を乗せて、8月15日の昼過ぎに列車は岡山に向けて出発した。行きと同じく「背広にカラ (襟) なしのワイシャツ」「赤皮の半靴」に「醤油色の手拭」を垂らし、「カバンと風呂敷包」を振り分けにして、谷崎夫妻から贈られた籠を提げての姿であったことは、想像にかたくない。

とはいえ、列車事情の悪い当時のこと、はたして時刻表通りに出発し、また到着したかどうかは保証の限りではない。それも敗戦の当日である。おそらく、実際に列車が出発し、岡山に到着したのは、所定の時間からいくらか遅れたものと考えておいたほうがよいのではないか。それでも太平洋戦争最後の日の伯備線列車は、新見を出発して2時間ほどで岡山に到着したのである。

長身の荷風が、伯備線列車の狭い座席に赤革靴をはいた長い足を折り畳むようにして座り、ゴトゴトと揺られつつ行く。膝の上には籠を置き、さまざまな物思いに身を委ねながら。窓の外では高梁川渓谷の景色が次々と飛び去って行く。それは、かつて沈思する若山牧水が限りない「さびしさ」を胸に抱えて足を運んだ真夏の渓谷である。

車窓からは高梁川で漁をする川舟が何艘も見えたことであろう。この季節のことであるから、カルスト台地から流れ落ちる名瀑「絹掛の滝」の流れは、きっと細かったにちがいない。

そこはまた、15年前 (昭和5年) に与謝野夫妻が荷風と同じように南下するはずであった道程であり、12年前 (昭和8年) 実際に与謝野夫妻が北上した路線でもあった[37]。

そして、おそらく同じ路線を井伏鱒二が往復するのは、17年後のことになる[38]。

はたして車窓を飛び過ぎるのは、敗戦にうちひしがれた人々の姿であっただろうか。そ

---

36) ただし、そもそも新見経由の行程を選んだことが、『蒲団』に対する荷風の敬慕のあらわれであった可能性が考えられる。すなわち『蒲団』に描かれた美しい新見の情景という先入観があったが為に、「清潔ならず」(86頁) と書かざるをえなかった可能性である。

37) 昭和4年には、岡山方面を経て高梁まで来訪、紅葉時の北備渓谷を探勝する。また、昭和8年には、倉敷で一泊した後、伯備線・姫新線を乗り継いで勝山、さらに津山に向かっている。石上 敏「与謝野寛・晶子と北備渓谷—なぜ夫妻は高梁への再遊を果たさなかったのか—」(『大阪商業大学商業史博物館紀要』第10号、2009年) 参照。

れとも、終戦に安堵する人々の姿であっただろうか。繰り返すが、乗り込んでくる人々の中に、その事実を持ち込む者はいなかったのであろうか。それとも荷風が気づかなかっただけなのか。『断腸亭日乗』に従う限り、この日荷風は、敗戦の事実を岡山の寓舎で知ることになる。

【追記】

本稿を投じて後、『山陽新聞』に、「困窮伝える永井荷風の書簡発見　終戦翌年、知人に布団頼む」という記事が載った（2009年5月13日朝刊）。

従弟一家との同居によって、「さわがしく夜もべんきやう（勉強）することが出来ません」と、早く没した旧友・二代目市川左団次の妻（高橋とみ子）に窮状を訴えた内容の書簡であり、「人との暮らしにリズムが合わない様子などを裏付ける新発見の書簡」という中島国彦氏のコメントが載る。

戦時中を通じて、さまざまな形で他者との共棲を余儀なくされた荷風は、敗戦をきっかけとして「独棲」の度合いを強め、単独者としての境位を深めて行くように見える。

本稿にも述べたように、その疎開体験は、より深い他者への感謝の意識を荷風に与えつつ、しかしその後彼はさらに深く、「個」の内へと抜き差しならず沈潜して行くことになる。1959年の荷風の死は、社会史的に見れば、いわば「孤独死」の先走りの一例であった。

【謝辞】

本稿を草するに当たり、とりわけ岡山県立図書館の関係各位には、少なからぬご助力を賜わりました。記して鳴謝いたします。

荷風や谷崎の疎開先・仮寓先についてお話をうかがいました方々は、ここにすべてのお名前を記すことができず心ならずも省略させていただきますが、以上を記して感謝の意に代えさせていただければ幸いです。

また、本稿は平成20・21年度大阪商業大学比較地域研究所研究プロジェクト「グローバリズムの中のアジア経済と社会」の成果の一部です。プロジェクト遂行にあたり、多大なご協力を惜しまれない学術研究事務室の各位に心より御礼申し上げます。

38）井伏鱒二「千谷の牛市」（『三田文学』1928年8月号に「旅行案内」として初出、1936年8月刊『静夜想』所収。『井伏鱒二随筆全集　第2巻　山の宿』春陽堂書店、1941年、『井伏鱒二選集　第6巻　架空動物譚』筑摩書房、1949年などに収録）。